
貴女だけにこの想いを～新蘭ファンタジー王国伝～

ユズポン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴女だけにこの想いを〜新蘭ファンタジー王国伝〜

【Nコード】

N3011J

【作者名】

ユズポン

【あらすじ】

ある二つの王国は、七年前独立し、ついに戦争を始めた。

そんな中、二人の恋人は互いを想い、戦争が終わる事を願っていた。そして恋人の片割れ、シンイチは父の命令によって戦いに赴く事になる???。

大怪我を負ったシンイチは、戦争を影で操る、>>神<<の存在を知る。対策を練ろうとしていた矢先、次の戦いが襲いかかる！

>>神<<の強力な魔法、「ナイトメア」。

その魔法により、なんとランに危機が迫る!!

何と、ランは敵に洗脳され、敵方に回ってしまったのだ。

新たな仲間、ヘイジとカイトを加え、ランを取り戻す事に成功した
シンイチだったが、次は>>神<<によりシンイチに魔の手が――
――！！！！

第2部、「闇の法律、光までも奪う」指導！！果たしてシンイチ達
は、世界の平和を取り戻せるのか！？

1 今宵、戦いの幕開けとなり

フェルディア王国。

人口一千万人という大規模な住民達と土地に恵まれたこの国は現在、ある問題を抱えていた。

???隣国との戦争、である。

この国を治める王、ユウサク？クドウ王は、民達を丁重に扱い敬われている王でもあり、また武力には自身の身をも案じないという王でもあった。

対し隣国のウルファル王国の王、コゴロウ？モウリ王は、酒に明け暮れ女好きの暴君だったが、戦いには負けた事のないという武力強い王でもあった。

3

この二国が、厄介な事に戦争を始めたのだった。正直言つて、両方の妃やその息子、娘は、戦争には気が進まなかった。

フェルディア王国の妃、ユキコは、平和を誰よりも願う女性。

またその息子シンイチも、武力での勝利は望んではいなかった。

ウルファル王国の妃、エリは呆れはて、娘のランは父に戦争を止めるように懇願していた。

この戦争により、犠牲は大きかったのち、得た物もあったという事である。

「父さん、お呼びでしょうか」

フェルディア王宮の一室で、シンイチは父ユウサクに言った。

「シンイチか。実は、お前に頼みたい事があるのだ。」

ユウサクは、低く、そしてしつかりとした声音で振り返る。

「ウルファルとの戦争、ですか」

「さすがだ、察していたか。???実は、お前に戦争に出てほしいのだ。」

「????なぜ俺を?」

「お前は剣の腕もいいし、戦力としては不足がない。民の為に、いち早くこの戦いに勝たねばならんだ。行ってくれるか?」

彼等の顔は真剣そのもので、冗談は一切感じられない。だからこそ、部屋には静寂が包まれた。

「????俺で良ければ。」

「????ふう」

シンイチは部屋を出て、扉を背に溜め息をついた。

「ウルファルとの戦争????か」

シンイチは目を閉じ、昔を思い出すように。

元々はこの二国は、最初は一つの王国だった。

シンイチもこの頃は隣国の王女、ランとよく遊んでいた。

しかし意見の対立。よって二つの王国に別れた。

彼としては、争いは避けたい。しかし、この状態ではそれも困難。

「ラン????今でも俺はお前の事????」

実はシンイチとランは、恋人同士である。

7年前、二つの国に別れるまでは。

戦への出発は明後日。

「ラン????」

ウルファル王宮。

「ラン??？」

エリは、娘であるランの部屋に入った。

「なあに？お母さん??？」

ランは空を見上げたその瞳を母に向けた。

「噂で聞いたんだけど、向こうの王子が戦に出るらしいわ??？」

「シンイチが？」

ランの瞳が曇った。それは、愛しい彼が戦によって傷付く事を恐れたため。

「どうしよう??？シンイチが死んじゃったら??？」

「コゴロウはもう止まらないわ。今は、無事に戦争が終わる事を願うだけ。」

「??？?そうだね??？」

国境を超え愛し合う二人は、共にお互いを想っていた。

今宵、嵐のような波乱の戦いは、幕を上げたのである。

1 今宵、戦いの幕開けとなり（後書き）

遂に書きちゃいましたね???

2 決戦前日(前書き)

じばらくらんは出ないと思います???

2 決戦前日

「ふああああ??？」

次の日の朝。シンイチは自分の部屋のベッドの上で伸びをしつつ起き上がる。

どんな複雑な感情があらうと、朝は来る。

しかしこればかりは仕方無い事なのだ。

いつものように朝を迎え、そして明日は兵士を引き連れ戦場へ赴く彼の心は浮かばなれなかったに違いない。

それも・・・愛する人の国となればなおさら。

彼は今日、ある場所へと向かう予定だ。

幼い頃からお気に入りの、海に面したあの場所へ。

七年前までは、ランを引き連れ行った事もあった。

その時は輝かしく、懐かしい思い出。

王子だとバレないようにフードを深く被り、自分の部屋の大きな窓を開き外に出る。

警備兵の目を欺き、あの場所へと向かう足取りは、いつもより重かった。

海岸近くの灯台。軋むドアを開け、石の階段を登る。

????潮風が心地よい。

自然の風を感じ、戦争の事など忘れそうになる。

カモメが海上を飛び、群れを成している。

おそらく魚を捕っているのだろう。

まるでそれは、人間と同じ弱肉強食そのものだ。

フードが取れないように端を手で掴む。

ここが王宮のしきたりにしぼられている彼の、唯一の安息の場所なのだ。

自然の匂いを鼻に焼き付けながら、シンイチは体を翻えした。
すると???

ガチャ

「あ????」

ドアを開けて一人の青年が姿を現した。

シンイチは顔を見られる事をおそれてさらに深くフードを被った。

そして、その挙動不審な行動を見せられた青年は、薄笑いを浮かべて言った。

「大丈夫やて。ここなら誰も見とらんし、フード取っても大丈夫や。王子様？」

その青年は何もかも見据かしたような瞳で言った。

「!?!」

自分の正体を知っている???!?

シンイチは心底驚いていた。そしてゆっくりフードを取った。

「やっぱりな??？」

「お前???何で分かった？」

シンイチはとりあえず聞いてみる。

「カンや。」

「????」

呆れた顔で青年を見、そして名乗る。

「知ってるみたいだけど、一応名乗っとく。俺はシンイチ?クドウ。

お前は？」

その青年は、軽快などこかの方言で言った。

「俺はヘイジ。よろしゅうな」

しかしその青年はシンイチのように名字は名乗らなかった。シンイチはさっきのヘイジのように薄笑いを顔に浮かべる。

「ああ、よろしくな????オリガ王国の王子様?」

そしてさっきのシンイチのようにヘイジも驚く。

????なぜ分かったのか。

とでも言いたげだ。

ちなみにオリガ王国はフェルディア王国とは遠く離れた大きな王国で、彼はその王子なのだ。

「なんで分かった?」

「お前、名字名乗らなかつたら?それに、そのカンの良さはオリガの父譲り。違うか?」

「せ、せや???けどホンマに凄いなあ。」

「あとは、カンだな」

「?????」

王国の王子二人は、しばらく笑い合った。

久しぶりに、心から笑う事が出来た????

そんな日だった。

それからヘイジと別れ、明日への準備を始めるのだった。

????決戦は、明日。

2 決戦前日（後書き）

前書きにも書きましたが、しばらくランは出ません。シンイチの、決戦です。

次回は、シンイチが???って事になります。

（分からない!!!）

ラン（蘭）ファンの人は、しばらくはシンイチをお願いします。すいません。
では。

3 泣いてないか???? (前書き)

自分で付けといて何ですけど、サブタイトルの名前はどうかと思います???

3 泣いてないか?????

（翌日）

いつも静かな朝を迎えるフェルディア王国も、今日に限って騒がしかった。

それもそうである。

フェルディア始まって以来の大戦争に、期待の星、シンイチが出るのだから。

王室・・・

「シンイチ、準備は出来たか？」

シンイチの部屋に、珍しくユウサクが来ていた。

「出来ました、父さん。」

武器を身に付け、腰に帯刀。一通り終え、シンイチは父を見た。

朝ご飯は済ませた。

「いいか。くれぐれも、怪我なんかするんじゃないぞ。」

ユウサクは言った。

さりげなく息子を気遣う所が、何より家族を大事にしている証。それがユウサクなのだ。

「????。ええ、気を付けます。」

運命の時は、刻々と迫っていた。

「王子！！頑張って！！」

「ウルファルを倒して！！」

馬に乗り何千人をももの兵士を連れ戦いに赴く彼には、国民の多くの

剣の名手、100年前きつての天才と言われた彼とさえも、彼だつて人間。

怪我をすれば血が出るし、涙だつて出る。

100人程度一人で倒し、シンイチは周りを見る。

しかし敵の数は減っていなかった。そろそろこちらでも死亡者や負傷者が出ているし、シンイチだつて怪我の一つもしている。

すると???

「?????!?!?!?!?!」

後ろを振り返り、シンイチが見た物、それは?????!?!

自分に振り下ろされる大剣。

ガツツツツ!!!!!!

「うあ?????!?!」

凄まじい痛みと共に、鮮血が舞う。

肩から腹にかけ、線のように深い傷が出来ていた。

「つつつ?????!?!」

崩れ落ち、地面に血が広がる。

ふと、敵兵士の声が聞こえて来た。

「なあ?????フェルディア、どうするんだ?」

「確か、乗り込んで妃を人質に取って王を脅すらしいぞ」

朦朧とした意識の中、シンイチはそれだけしか聞き取れなかった。

とにかく、国が危ない。

それだけは分かった。

(母上?????父上?????)

夜。

一旦引いたのか、戦場は静まり返っていた。

そんな中、傷だらけで王国を目指しおぼつかない足取りで向かう男がいた。

そう、シンイチである。

彼の馬はもうとつくに死んでしまっていたし、タカギ達の行方は分からない。

とにかく、夜が明けるまでに国に着かなければ、王国民の命は無い。

(急ごう????)

シンイチはもう駄目かと思われる程の重傷だった。

(ラン???泣いてないか???)

しかし、こんな時さえ思うのはランの事。

あの笑顔で、あの声で。

もう七年近くも会っていないというのに。

彼の思いは、彼女に伝わっているだろうか。

(王国だ???)

夜が明け初め、王国でのそろそろ門番が出て来る時間帯に、シンイチは王門に着いた。

朝日を浴び、輝く王国は、いつ見た時よりも綺麗だった。

???ドサツ

そしてシンイチは力尽きた。

「おい、あれ、人じゃないか?」

「あれ、王子じゃないか!」

おーい!!誰か来てくれー!!王子が倒れてるぞー!!!

!

彼等の心内とは違い、空は清々しく澄んでいた。

3 泣いてないか???? (後書き)

哀ちゃん出そうかなあ???

感想?意見、お待ちしています。

4 God・&devil・(神&悪魔)(前書き)

組織のベルモットも使っている、あの言葉が出てきます。

4 God・&devil・(神&devil・悪魔)

「遂にあの王子も倒れたか」

暗い室内に、男の声が響く。

その部屋に、窓はなかった。壁だけが延々と続くこの部屋は、重苦しさを感じさせていた。

「はい。旦那様」

部屋の中にもう一つ、女の子の声が響いた。おそらく10歳程度。

「これであれば妃を捉え、王を殺すだけとなった。計画は最終段階

そう、私の、完璧なる計画がなーーーーー」

室内の唯一の灯りは、数本の蝋燭のみ。

その蝋燭に近寄りすぎた蛾が、音もなく燃え、命を落としたり。

その男の傍らに着く少女、アイ？ハイバラは、曇った表情をしていた。

「陛下!!!」

フェルディア王国王宮に、服が何故か血まみれの門番が大声をあげて入って来た。

門番はユウサクの玉座の前にある、階段の数段下に着くと、口を開いた。

「どうした、何があった」

「王子が?????門の前で倒れて?????傷が深いです!!!」

「何だと!?!シンイチが!?!」

「あなた?????!」

隣に座っていたユキコが、夫を見る。

「分かった。すぐに医者を手配する。悪いが、シンイチを自室まで運んでやってくれ」

門番は分かりました、と言いきり去っていった。ユウサクは、医者を手配するために、家臣に命じた。
タイムリミットは、あと少し。

「?????」

シンイチが目を開けて見た物、それは心配気味の両親の顔と、どこにいたのかヘイジの顔。

「父上???母上???それに、ヘイジ?????」

「シンちゃん!!」

「シンイチ!!」

ユキコは目尻に涙をためて、ユウサクとヘイジはどこか安心が交じった顔だ。

「!!そつだ、父上、母上、伝えなきゃいけなつ?????!!」

シンイチはいきなり起き上がって、ウルファルの事を言おうとしたが、体中にはしつた痛みによってくじけた。

「シンイチ、無理するんやない!!」

ヘイジが叫ぶ。ふと見ると自分の体には所々に包帯が施されていた。
「何があつたんだ?」

シンイチがまた横になった所で、ユウサクが静かに聞いた。

「????ウルファルが、もうすぐ来る。」

「????え?」

「母上を人質にとつて???父上を???この国を脅すつもりなんです」

「?????!?何やて!?!」

ヘイジが明らかに驚いている。

「とにかく父上、早く残っている軍勢を門前に出し、相手が来たと同時にそいつらを捕らえましょう。そしたら、ウルファルだって不
得手になるでしょう。」

「そ、そうだな???」

すると、シンイチがベッドを降り、着替え初めた。

「何してるんや、シンイチ!!!」

初めに彼の行動に気付いたのは、ヘイジだ。

「何って???」

「まさか、お前もやつらに会いに行くん???」

「それ以外に何かあるんだよ?」

「「「???」」」

3人は呆気にとられた。何にせよ、彼は深手を負っている怪我人なのだ。

「??? シンイチ、お前はここで待っている。」

「でもっ???!!」

「心配なのは分かる。だが、お前の傷は深いし、しばらくの休養が必要だ。私達なら、大丈夫だ」

説得力のあるユウサクの言葉に、シンイチは押し黙った。

（夜）

「ごそごそ???」

フェルディアの門前に、数人の影が動いていた。

「???? 突入するか???」

ふと、人影の一つが聞いた。男の声だった。

「そこまでだ!!!」

男の声から数秒たった後、カツと暗かった周りが明るくなった。

「?????!? 何っ!?!」

「そこまでやで? モウリ国王?」

そう。男の声の正体は、ゴゴロウだったのだ。他の数人は、彼の国の兵士だろう。

「さあ、モウリ、吐いてもらおうか、お前をそこまで動かした首謀者を???!!」

次に、ユウサクが言った。

「????」

「なあ？何で首謀者がいるって分かったんや？」

ユウサクの隣にいた色黒男????ヘイジはユウサクに聞いた。

「ここまでのモウリの行動を見て来たが、一言でいうと暴君だった。しかし、長年の付き合いで、モウリはそれほど酷い奴ではない。モウリ、誰なんだ？首謀者は？」

「????????????????だ。」

コゴロウは薄く口を開けた。

「え？」

「偉大なる????神、だよ」

「????」

その答えの後に、コゴロウはさらに続けた。

「Since we're trying to raise
dead against the stream of
time.
we can be both of God and
devil.

4 God・&devil・(神&悪魔)(後書き)

コゴロウが言った言葉の読み方を、ここで紹介しようと思います。
(シン ス ウイ ア トライング トウー シイズ ザ デッド
アゲインスト ザ ストリーム オブ タイム ウィー キャン
ビー ボース オブ ゴッド アンド
ザ デビル)
です。よく分かりませんねえ。
では。

5 ただ一つ気になる事

「何!？」

コウサクやヘイジは声を上げた。コゴロウが言った言葉の意味。訳すと、

(我々は神でもあり悪魔でもある???何故なら???時の流れに逆らって???死者を蘇らそうとしているのだから???)

この意味が分からないのだ。

そして、>>神<<の正体――

謎は増えるばかりである。

「さあ、お前ら、退くぞ」
呆然としているコウサク達を横目に、作戦が失敗し、人数的に勝てない事を悟ったのだらう、他の数人の兵士を連れ、コゴロウは去っていった。

「???作戦は失敗か。」

アイの傍らで、ワイングラスを片手に男は少し呆れを交えて言った。

「どうやら、あの王子は生きており、王にそれを伝えたのでしよう。」

「アイは、男をその純粋な目で見据え、言った。」

「ふむ???あの王子、なかなかしぶといようだ。まあ、最初からコゴロウには期待しておらんかった。次は、娘の王女でも使うとするか――」

男の口元が吊り上がり、不気味に笑った。

とある一室で、男とアイの会話は、森のような静けさを持っていた。そして、危機はまだ去っていないのである。

「シンイチ、具合はどうだ？」
あれから一週間後。戦争の方も落ち着いており、ユウサクはシンイチの部屋を訪れた。
「はい。もう傷も塞がってますし、意外と浅かったんで、今日は外に出てみようと思います。」
「大丈夫なのか？」
ユウサクは聞く。心配そうな色が顔に浮かんだが、逆にシンイチは笑顔だった。
「大丈夫ですよ。いってきます。」
手早く身支度をし、シンイチは王宮を出た。

「コナーン!!!」
シンイチとはある武器屋を訪れた。店の店主は、笑顔でシンイチを迎えた。
すると、奥から一人の少年が出て来た。眼鏡をかけた、10歳前後であろう少年。
彼の名前はコナン？エドガワ。
実は彼、シンイチの従兄弟にあたるのだが、訳あってここで武器屋を営んでいる。
「シンイチ兄ちゃん!!どうしたの？」
無邪気な笑顔を向け、コナンは言う。
「話したい事があるんだ」
どことなく真剣な顔のシンイチの感情を察したのだろう、コナンは何も聞かなかった。

「????ウルファルの事なんだけど」
二人は、誰もいない、静かな平地に来ていた。

柔らかく、青々とした草木に身をあずけ、シンイチは寝転がった。

「ラン姉ちゃんの事、心配なんだ？」

シンイチは頷く。

「ゴゴロウが>>神<<の配下だとしたら、その娘であるランが狙われる確率が高い。でもフェルディアだけじゃあそれを防げない？

??お前の国の力を借りたいんだ。>>神<<

<<がその姿を現さないうちに」

一気に喋ったのが傷に障ったのか、シンイチは咳き込んだ。

「シンイチ兄ちゃん、今日は休んどいた方がいいよ。国の事は、父さんに頼んでみる

」

そう言い、コナンはシンイチを王宮まで送った。

もつとも、本人はいいと言ったのだが。

こういう事には問答無用である。

そして、平和だった日は、すぐに更けた。

5 ただ一つ気になる事(後書き)

投稿送れてすみません。

次はいよいよランを出そうかなーと思っています。
では!!

6 ランの危機と忍び寄る影（前書き）

1ヶ月ぐらい投稿してませんでした。投稿を心待ちにしていた方、すみませんでした。

6 ランの危機と忍び寄る影

「あれ？この小鳥??？」

ある日の朝。ランはいつものように朝を迎え、国一望を見渡せる展望台(?)に出た。

そこで、特別な小鳥がいたのである。

「シンイチの??？鳥？足に手紙が括りついてる??？」

ランは手紙を読み上げ、蒼白な表情になった。

「??？お父さんが??？戦争を引き起こしている>>神<<の手下??？!？」

ガタツ??？」

ふと、ランの後ろで物音がした。

「!？誰!？」

出てきたのは黒服の男数人。ランはすぐに取り押さえられ、睡眠薬をかがせられた。

「??？シ??？ンイ??？チ??？」

朦朧とした意識の中、ランはシンイチの名を呼んだ。

「ん？」

王室で、シンイチはふと何かを感じたように振り向いた。

「何だ??？」

「シンイチ兄ちゃん!！」

コナンが焦った様子でこちら、つまりシンイチのところへ駆け寄ってきた。

「どうした？コナン??？」

「いない??？」

「え？」

その意味不明な単語に、シンイチは首を傾げた。

「王国に????民が全員????いないんだ!!!」

「何だつて!?!もしや>>神<<の仕業じゃ????」

「ラン姉ちゃんも????その人達に連れさられたかも????」

「くそつ!!!」

壁を殴りつけ、シンイチは悪態をついた。事態はもう、最悪なのである。

しかしこの時、シンイチは思ってもいなかった????

この後、ランがあんな姿になって、帰ってこようとは?????

6 ランの危機と忍び寄る影（後書き）

すごく短いですね???急いで書いたので、だいぶ駄文となりました。卒業式とかあったもので???（作者は今度中学生です）
次回は微妙に平和も混ぜたらいいなと思っています。
では、また次の作品でお会いしましょう。

3 / 2 2

7 フレア

「王女を遂に捕らえたか」

男の傍らで、アイは慣れた手つきでワインをグラスに注いでいた。

「?????どうされるのですか?」

アイは不思議そうに、男に問いかける。

「王女には、私の配下となり、王子に近づいてもらう。だから???

男はをその先の言葉を、溜め息まじりに言う。

「アイ、お前はどこにでも行け」

「?????!?!?」

「その前に????お前が情報をもらさないように、これを飲んでもらう。」

そして、アイは男に何かを飲まされた。

だんだん意識がなくなり????アイは男の部下によってどこか??
?フェルディアの近くに捨てられた。

「シンイチ兄ちゃんーん!!女の子が、うちの家の近くに倒れてる
!?!」

「はあ!?何でだよ!!」

シンイチは王宮の中にいたのだが、従兄弟であるコナンは王宮の中に簡単に入る事が出来る。

「とりあえず、来て!!」

コナンに連れられ、走りながらシンイチは思った。

(何でコナンの奴、些細な事で俺を呼ぶんだろ????)
そう、心の中で思いながら。

「この子か???」

「名前を聞いても答えないんだ??？」

「?????分らない」

女の子は、静かに呟いた。

「名前は、アイ????それしか、思いだせない????」
か細く、言った。

ドガァン!!!!!!!!!!!!

ふと、地面が揺れた。

「何だ!？」

「地震!？」

「門の方、から????？」

シンイチ、コナン、アイと、口々に言った。

「お前等はここでじっとしてろよ!！」

シンイチは二人にそう言い、門の方へと走りだした。

「やっと、来たようだな????」

シンイチが門に着いた所で、聞き覚えのある声がした。その声がする方には????

「ラン!？」

そう、ランがいたのだ。しかし、彼女の周りには異様な空気が立ち込めていた。

通常より低い声音で、ランは言った。

「私は、ランであり、ランではない。」

「!？」

シンイチは、意味が分からなかった。
そしてランは続ける。

「私は>>神<<の配下、コードネーム、フレアだ。」

7 フレア（後書き）

どうでしたか？今回は、ちょっと驚きの展開にしてみました。
感想、意見お待ちしています。

3 / 2 4

8 旅立ち

「蘭????!!」

「私はフレア。ご主人様の命により、この国を滅ぼす」

街のあちこちに炎が立ち上っていた。しかしシンイチはそれを気にせず、ただ目の前の幼なじみを見据える。

「蘭、どうしちゃったんだ!?まさか>>神<<に洗脳????」

「うるさい!!」

蘭????もといフレアの手から、オレンジの炎がシンイチに襲いかかる。

「危ないっ!!」

誰かに付き飛ばされ、シンイチは倒れこむ。

「ヘイジ!?!」

それはヘイジだった。

「ホンマ危なっかしいやつぢゃな????」

「つち!!」

フレアは舌打ちする。

(上出来だ。フレア、戻ってこい)

「?????了解。」

そしてフレアはふっと消えた。

「ラン!!」

「シンイチ、ウルファル王国に行ってくれないか？」

翌日。シンイチは父に呼ばれ、王室に来ていた。

「モウリが全て話すと言っているんだ」

「国王が???？」

「で、その道は危ないだろう。だから、仲間を付ける。入ってきてくれ。」

???

「ヘイジ、それにカイト!？」

ヘイジと、海の向こうの国、イルエス王国の王子、シンイチの従兄弟のカイト?クロバがいた。

「????フレアと戦う為には、お前も魔法を発動する必要がある。

????あの魔法を使う事を、許可する。」

その言葉にシンイチは敏感に反応した。

「あの魔法を????」

「とりあえず至急ウルファルに向かってくれ。」

「分かりました。」

(あの魔法?????)

ヘイジとカイトは疑問に思っていたが、とりあえず出発。

新たな冒険(?)の始まり。

8 旅立ち（後書き）

なんか、この話、4、5話で終わる気がします???

9 光の騎士

「くっそ???何でこうなるんだ」

早々、シンイチは悪態をついていた。

強烈な日差しの下。シンイチ一行は魔物に襲われていた。

???幾百もの敵に。

事の発端は、この暑さのせいだった。

ウルファルは森の向こう。その先には砂漠があった。

ただでさえ水分が少ないため、魔物は旅人の食料、水分を狙い。?
???今に至る。

「シンイチ、あの魔法っていうの、使うべきなんじゃねーの?」

カイトがシンイチに囁く。

「はあ????しゃーねーな????」

シンイチは剣を構える。

「光の剣!」

魔物があつという間に消滅。

「シンイチ???これ、どないすんねん」

???森の木々も吹っ飛んでいた。

何はともあれ。

無事ウルファルにつく事はできた。

「よく来た。では、さっそく話すとしよう。ランに、この宝石を触れさせるんだ全てはそれからだ。」

「????それで、ランがもとに戻る、と」

「そうだ。至急、ランを探しださねば????」

刹那。

ドゴオオオン!!!!!!

シンイチの後ろの壁が壊れる。

「?????!?!」

慌てて後ろに退き、身構える。

そこには。

「フレア?????!?!」

9 光の騎士（後書き）

ここから下はネタバレ????（オイ。）

後2話ぐらいの話。

>>神々による洗脳魔法、「ナイトメア」
ランを取りもどしたシンイチを、ナイトメアが襲う。

「シンイチー!!」

「我は>>神<<の配下、シャドウ」

「目を覚ませ!!シンイチー!!」

「今、戦いの幕が上がる」

貴女だけにこの思いを、新蘭ファンタジー王国伝

第2部 闇の法律(ナイト?ロウ)

的な感じですよ

ネタバレすみませぬ!!

10 11の地球上の誰よりも。(前書き)

今回から少し第2部突入です!!

10 この地球上の誰よりも。

「また、お前か???。次はウルファルを破壊する。」
ランは冷たい目で言う。

「ラン、思いだしてくれ!!俺達の絆は、こんなぐらいの事じゃ崩れないだろ!?!」

その蒼い瞳でランを見据え、シンイチは叫ぶ。

「地獄の業火^{ヘルファイア}!!」

辺りは炎に包まれる。

「ラン!!止める!!」

炎の中に、シンイチは飛び込んだ。

「シンイチ!!」

ヘイジとカイトが叫ぶ。

パアアアア???????

その時、奇跡が起きた。

「う、うああああ??」

一筋の光が辺りを照らし、苦しみだすランと?????????

ランの体に、宝石が吸い込まれていた。

そしてフレアは確実に、元のランに戻るうとしていた。

「何故????」

ランが言う。

「何故、私の事を???」

「何故って?それはな???」

「好きだからだよ、ランの事」

「????」の地球上の、誰よりも

フレア????いや、ランは微笑み、そして。

「ありがとう。シンイチ????」

幸せに満ちていた。

「さて、帰って婚礼を挙げようぜ」
「うん／＼／」

「ホンマ、気障なやつぢやなあ」
「ハハハ、ま、それがシンイチっていう事で。」

「まったく、ランを泣かしたら承知しねーぞ」
「あら、シンイチ君はそんな事はしないわよ。???誰かさんと違
ってね。」

これで終わりだと思っていた。

しかし。

「役立たずが???」

「?!?」

周囲に、どすの効いた声が響く。

「>>神くくだわ!!」
「ランが叫ぶ。」

「次は王子だ???」

どこからか黒い球体が浮かぶ。
そして向かってきた。

???シンイチの方へ。

「っ!?!」

「シンイチイ!!」

シンイチは黒い球体に飲みこまれた。

「「シンイチ!!」」

皆が何回も叫ぶ。

そして、黒い球体は消えた。
シンイチを残して。

「シンイチ!!」

ランが駆け寄る。

しかしシンイチはそれをバツと振りはらった。

「?????!シン、イチ?????」

「我は新たなる>>神<<の配下、シャドウ」

「闇に吞まれよ、>>神<<に背きし者」

シンイチは振り返る。

皆を見る目はもつ???

「見るがいい???闇の法律(ナイト?ロウ)を???」

????光を映していなかった。

「そして後悔するがいい????>>神<<による天罰がくだった時、
己の愚かさを????」

11 シンイチの正体

「シ、シンイチ?????」

ランが呆然としている。

それを見て、シンイチ????シャドウは、可笑しそうにクククツと笑った。

「俺は、>>神<<????あの方の忠実なる配下となったんだ??
?貴様等の知る、シンイチなどではない」

前の蒼い瞳と対なる紅の瞳を細め????シャドウは妖艶に微笑を浮かべながらそう言った。

「ウソ????ウソよ!!シンイチが????そんな簡単に闇に墮ちるワケない!!シンイチ????もとのシンイチに戻ってよ????」

蘭の声はあまりにも悲痛で。

傍にいたカイトやヘイジも、苦悶の表情になる。

「闇に墮ちるはずがない?そんな事は誰が決めた????人間とは、そういうもの。貴様等もそう。いつ何時闇になるかなんて、分かるはずもないだろう?」

シャドウのその言葉に、皆押し黙ってしまふ。

「何か、手はないだろうか?????」

「いいか、よく聞け。満月の晩、俺はこの国を滅ぼしにくる。全員が凍りついた。」

この国を滅ぼすだ??????

「事態を避けたければ、俺を止めてみせろ」

そう言いシャドウはフツと消えた。

フェルディア王国にて。

「そうか???ラン王女の次はシンイチがか???」

ユウサク王は、重苦しく溜め息をついた。

「おそらく、シンイチを闇に染めたのは洗脳魔法、「ナイトメア」だろう。???まさか現代にまだ継続されていたとは???」

「叔父様、その魔法について何か知っておられるのですか?」
ランが問う。

「ナイトメアは古代にその力があまりに強大すぎるために、封印されたとされる魔法だ???。あれは、対象者を悪に染めるだけでなく、対象者の魔法の性質を、対極にしてしまうのだ」
つまり、とユウサク王は続けて言う。

「ラン王女は水と治癒の魔法が使える???本来王族は2種類の魔法しか使えないのだが???シンイチは光と氷と星の魔法が使える」

「シンイチは???何者なんや?」
いままで黙っていたヘイジが、言う。

「話しても、いいのか?それを受け止める覚悟はあるか?」

ユウサクの問いにラン、ヘイジ、カイトの3人は頷く。

「シンイチは、私達の子供ではない???」

耳を疑った。

「シンイチが、お二人の子供じゃない????!?じゃあシンイチは
?????」

「古代人類???光源の民の末裔だよ」

この世界最大の災厄が、動き出そうとしていた。

11 シンイチの正体（後書き）

ここで、シンイチ、ヘイジ、ラン、カイトの魔法のくわしい解説を

シンイチ????光、氷、星（シャドウ時：闇、蒼炎、大地）

光：（めくらまし）光を物質化する。

光の剣 光の無数の剣が敵を襲う。

氷：氷をいろんな形に変える。槍や盾、とにかくいろんな物。夏にはかき氷に使用。

星：自ら星のように速く動く。星座を書けばその星座の象徴を出せる（さそり座 さそり）

闇：光の対。闇の空間に相手を閉じ込めたり、物質化。

蒼炎：そつえん文字通り蒼い炎。

大地：地面を陥没させたり、岩や木々を操ったり。（サイコキネシス？）

ラン????水、治癒（フレア時 紅炎）

水：水を操る。彼女が本気で怒ると津波が起きるといふ噂がある。

（（

治癒：その名のとおり治癒。怪我、病を治せる。

紅炎こうえん：シンイチの蒼炎と対なる炎。

ヘイジ????雷、風

雷：相手にいかずちを落とす。攻撃力高し。

風：相手を吹き飛ばしたり、かまいたちを作り出したりする。

カイト????雪、マジック手品

雪：吹雪を起こしたりする。

マジック手品：その通りマジック。鳩とかw（）

????これくらいですかね？

彼らはまたこれから新しい魔法を次々に習得するかも????!?

うん、多分ね（タヒろうか

完全に趣味を入れすぎてワケ分かんなくなってますよねこの小説（
ていうか駄文）

12 受け継がれし剣

「????光源の????民?????」

ランは首を傾げる。

「これを見てくれ」

ユウサクは召し使いから一冊の本を受け取り、皆の前に広げた。

「世界が闇に包まれし時???我が光源の一族、照り輝く剣を持ち、
闇の根元を打ち破る。」

「この剣というのは?????」

「????私の甥、コナンの国に眠っているそうだが???すでに
>神<<により奪われてしまったらしい。」

「何やて!?!」

ヘイジが驚く。

「この剣があればシンイチを元に戻す事は容易いのだがな???万
が一、シャドウの手に渡れば???」

周りは暗い空気に包まれる。

「?????で、話を戻すが。ナイトメアには、酷い副作用がある。」

「「「ええっ!?!?!?」」」

「魔法を受けた者の心が徐々に闇に取り込まれていくんだ。ラン君
はまだ対応が早かったから事なきを得たが???シンイチは次の満
月の晩に襲撃すると言ったのだろうか?」

「

「ええ。」

カイトが頷く。確かにシャドウはそう言っていたはずだ。

「????その晩が、ナイトメアがシンイチを完全に闇に染めてしま
う限界の時間なんだ」

????つまり。

その晩までに、もしくはその晩にシンイチを闇から救わなくては、シンイチは完全に闇の存在、「シャドウ」となってしまふ。

何か手を打たなくては。

誰もがそう思っていた。しかし、良い案が浮かばない。皆の間には沈黙が続いた。

「シャドウ」

「????はっ、お呼びでしょうか」

薄暗がりのとある一室で、男はシャドウを呼びつけ、口を開いた。

「計画の進み具合は？」

「はい、全てにおいて順調でございます。アステナ王国の住民は、国内の情報について、一切口を割りませんが。」

「ふ????強情な事だ。まあいい。フェルディアの兵士共は？」

男の傍らに膝をつき頭を垂れ、シャドウは答える。

「はい。牢に閉じ込めております。最初のうちは何とも騒がしい様子でしたが、抵抗を諦めたようです。」

「あいつらもお前の姿にずいぶん驚いていたようだからな」

兵士????その中にはワタル?タカギも含まれている。

「お前がここへ来てから、全てがスムーズにいく。感謝するぞ。」

「????ありがたきお言葉。」

シンイチがここに来てから、既に十数日が経過していた。

「????そこで、お前にこれをやろう」

男が差し出したのは、金に輝く剣。全体にして50cm。
シャドウはそれを手にとった。

すると、金が若干黒ずんだ。

「古代より受け継がれし、光の金剣だ。それを使って次の満月の晩、
ウルファルを滅ぼせ」

「????かしこまりました」

「最終段階にはジンやウォッカ、ベルモットにも加わってもらおう。」
「?????は。」

シャドウは部屋を出る。

「ふう????次の満月が楽しみだな」

すると、どこからか声が聞こえてきた。

(こんな事をして、何の得になるというんだ!?)

シャドウはそれに気だるげに答える。

「>>神くくの計画に必要な階段だからさ。俺はあの方のためなら
何だつてやる。例えばそう、あのランとかいう娘を葬る、とかな」

(?????!?止める!!ランに手をだすな!!)

「ククク????はいはい。」

ついに、剣はシャドウの手にわたり。

対決の時は、刻一刻と、迫っていたのである。

?????世界の命運をかけた、戦いが。

12 受け継がれし剣（後書き）

アステナ王国???コナンの国。

ここでは>>神<<||黒の組織のあの方
と解釈して頂ければ幸いです(^| ^)

最終段階ではジンやウォッカ、ベルモットが出るらしいですよ。
他人事か)

番外編も出す予定です。

シンイチはナイトメアの中で何を聞いたのか!?
でも予定は未定?です。

出すか分かりませんw(氏)

では!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3011j/>

貴女だけにこの想いを～新蘭ファンタジー王国伝～

2011年10月9日20時47分発行